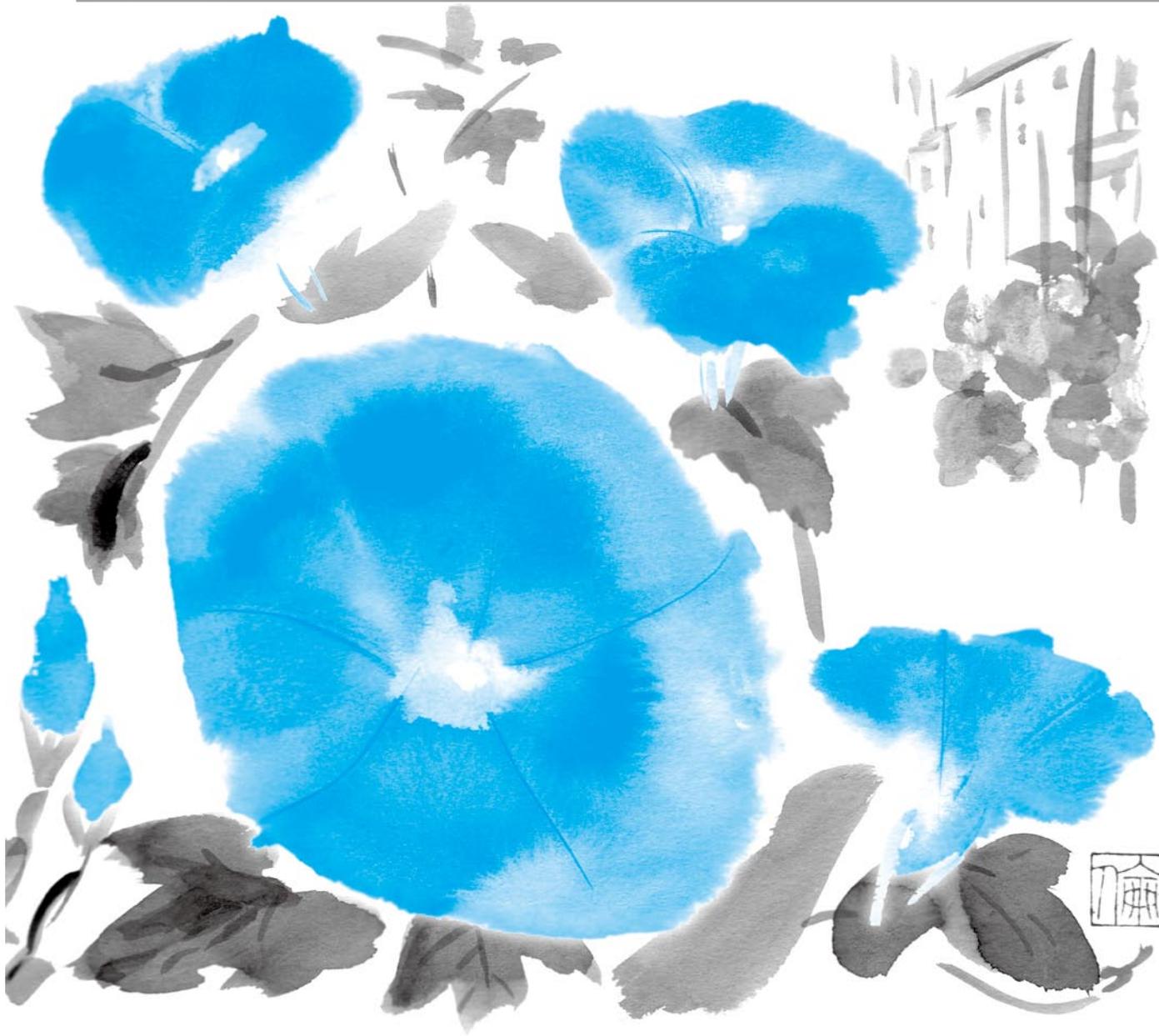


一人ひとりの想いつたえたい ▶▶▶ あなたの声でつくる情報誌

NO. **67**
2007・夏号

まなこ

企画・発行 武蔵野市企画政策室 市民協働推進課 男女共同参画担当



特集 手づくり、物づくり

取材

- 私の本ができた!!
- 車づくりからケーキづくりへ
- 七宝焼きと共に生きた半生

渡辺 令子さん
町田 罔雄さん
横山 芳子(芳苑)さん

寄稿

- ・ つくり直したいのは、モノ？私？

まなこレポーター 斎藤 ユリ

情報

- ・平成18年度 男女共同参画推進団体活動補助金交付対象事業の紹介
 - ・平成19年度 予算
- 市民協働推進課 男女共同参画担当

昔ながらの職人芸から高度な科学技術の領域まで、
今「物づくり」の大切さが見直されてきています。
そんな時代を背景に、平成19年度の『まなこ』では、
「つくる」を年間テーマに取り上げます。
時間や手間がかかっても何かをつくることから
どんな新しい発見があるか、
子育てや仲間づくりなど人間関係の問題も含めて
考えていきたいと思います。

流行りの物がもてはやされる世の中、
街に溢れているのは同じような物ばかりです。
それが、私たちのほんとうに求めている物でしょうか。
何か自分で、ほかの人とは違う物をつくってみたいと思ったことは
ありませんか。

67号では、物づくりを通して、かけがえのない自分の世界を見つけた方たちの想いを紹介します。

私の本ができた!!



りょうこ
渡辺 令子さん
吉祥寺北町



「思いのすべてが詰まった私の本『ラピスラズリ』だから、堂々と出版したい」。清々しく話す渡辺令子さん（40歳）は小6と小3、二人の男の子のお母さん。普通の主婦の「決心」と「奮闘」を語っていただきました。

「いつか絵本をつくりたい」と、令子さんの夢は膨らむ。

自分を見つめる

思えば、学生時代は遊びで童話や詩を書いたこともあった。子どもの頃の父との約束は日記をつけることで、毎日やり通した。手紙を書くのも大好きだった。

「気がつけば、かたちは違っていても、私はいつも『つくる』ことをしていたのかもしれない。「いつか本をつくりたい」。確かに心の底にそんな気持ちがあったと思う。

結婚して子どもを産んでからは、忙しさとともにそんなことなどすっかり忘れてしまっていた。ただ、どうしようもなくつらいときだけは日記を書いた。「書いていくと、気持ち落ち着いて元気になれる」。

約3年前、新潟県長岡市に住んでいたとき、身の震えるような出来事が立て続けに起きた。それは北海道に住む父の病い、子どもの怪我、そして中越地震だった。つらく苦しさなか、「いつ何があるかわからない。大切な人がどんなに苦しくても代わってはやれない」ということに気づいた。同時に、「自分自身もい

車づくりからケーキづくりへ

くにお
町田 園雄さん 吉祥寺北町

高度経済成長期に大企業でのリーダーシップをとり「家庭より仕事だ!」と言われ、自らも言いながら走り抜けてきた男性。穏やかな退職後に出会ったのはケーキづくりだった。自宅で教室を開いてから13年。町田さん(73歳)が語る手づくりの魅力は?



レシピ番号166番の
チーズクリームケーキ



ケーキ教室は 小さなきっかけから

「企業の停滞に直面したときでした。55歳のときに早期退職をしたのです。そのときふつと考えたのが『いい音楽が流れる喫茶店を経営してみたい』でした。ちょうど新聞に載っていた喫茶店経営講座を見つけ、赤坂にある学校に通い経営のノウハウやコーヒー、紅茶の入れ方、そして初めてケーキづくりを習いました」。

ところが「ケーキの面白さを知った頃から次第に喫茶店経営の興味が薄れてきて……。あとは知人や家族のために楽しんで作っていました。ある日、近くに住む娘に頼まれ、孫の幼稚園の

行事にケーキを持たせたのがきっかけで、そこのお母さん方に望まれ、妻の後押しもあって自宅で月に2回ケーキづくりを教えるようになったのです」。

そのほか長年、母校のオーケストラでフルートを吹き、木管アンサンブルなどの音楽グループでも活躍する町田さんの仲間やその友人たちもケーキ教室に加わり、月に1回のペースで教えている。

手づくりの魅力

「子どもの頃から物づくりには興味がありました。いろいろな模型づくり、リング箱を使って本棚なども作りましたね。仕事は自動車メーカーの生産技術部門で品質管理をしていました。が、これがケーキづくりにも共通しているのが面白いです。例えば車の部品が一定の品質に保てなかったら、その原因が人間のやり方なのか資材か、あるいは設備なのか徹底的に研究し原因を突き止めます。ケーキも素材、分量、加熱時間、季節の微妙な部分まで計算して作りますが思いどおりの仕上がりにならないと、車の品質と同じように理由を探し

出すのです」。

「また、粉、砂糖、バター、卵だけの組み合わせで、スポンジ、クッキー、パイ、タルトなどまったく異なる製品ができるのも作っていて楽しいところです」。

「お母さん生徒」たちの一言

教室でチーズケーキの生地づくりにがんばっていた、生徒の一人は「家で作ったスポンジですとなぜか堅くなってしまいます。先生が作るとフワツツとしているのに……」や「先生は独自の道具を使います。例えば、ロールケーキをしっかりと巻くために30センチ物差しで充分に抑え付けながら巻いていくとか、木でクッキーの形状を整える枠なども手づくりして使うのです」などと話してくれました。クッキングテーブルには市販の調理道具以外の小道具も目に付き、それを操る町田さんの手業には無駄な動きがない。

教室には手づくりする楽しさと、お母さんのケーキを待つ家族の笑顔まで見えるようだ。

無理せず、気負わず

「お忙しい現役時代でも時には

家事などでキッチンに立たれたことは？」と質問してみた。「あの頃はいつも仕事優先だった。多くの男性がそうだったと思いますよ。家事に手を出した記憶はあまりないですね。でも子どもたちにはいろいろな思い出を作りたいと一緒に旅行をしたり、可能性を見出すためにもさまざまな経験をさせる努力はしたつもりです」。

そして「会社人間からケーキの教室が始まったのも趣味の音楽がきっかけだった気がするし、時には、バザーなどにケーキを提携して喜んでいただけの満足感もあります。夫婦の健康と音楽があつて無理なく今の状態を維持していきたいですね」と。

取材 浜 俊子(文)



教える前には必ず試作をし写真入りのレシピを用意。

七宝焼きと共に生きた半生

ほうえん
横山 芳子(芳苑)さん 境

七宝作家としてたゆみない創作を続けていらっしゃる横山さん(82歳)にお話を伺った。母校の「奉仕の精神」を信条として、七宝焼きの普及活動に全力をそそいでおられる。



作品の中から

結婚、出産までのこと

名古屋出身。東京の学校に行きたいという思いで、大学は国文学科を選んだ。子どもの頃から絵が好きで、本当は絵の学校へ行きたかったのだが、絵では生活できないという母の助言に従った。

終戦後まもなくして、総理府に就職。婦人厚生部という部門で仕事をした。昭和23年に結婚。当時はまだ焼け残ったビルに生活するような時代で、家族の希望もあり、子どもが生まれる3ヶ月前まで勤めを続けた。その頃は子育て支援もなく、結婚、出産で勤めをやめるのが普通だった。

七宝焼きに出会い、教室を開くまでのいきなり

昭和30年、長女が小学校一年のとき境に住むようになった。その頃、週刊誌の記事を見た友人と、七宝焼きに興味をもち、講習会に通うようになった。ところが36歳のとき、主人が交通事故にあい、一晩危険な状態になった。三人の子ど

もとのそれからの生活に不安をもち、収入を得られることをしなければと、そのとき真剣に七宝焼きをしてみようと決心した。名古屋に住む知り合いのついで、愛知県海部郡にある、今の七宝町に通って、職人さんたちと一緒に伝統七宝を習った。



そのときは夏休み毎に実母が子どもたちをみてくれていて有難かった。平行して彫金も習い、子どもの小学校のPTAの友だちと七宝焼きの研究会を作り、昭和38年に教室を始めた。来年は教室の創立45周年を迎えます。

思い出に残るエピソード

教室を開くとき書道をする母

にポスターを作ってもらい、自転車ひびりが丘の方まで貼りに行った。武蔵野美術大学の学生に七宝焼きを教えたこともある。武蔵野市から頼まれて旧庁舎や市民会館で講習会をした。保谷(現西東京市)の住吉会館でも講習会をするなど、七宝焼きは人気があった。教えた人の中には自分の教室を開いた人も

いる。「日本七宝クラフト協会」を現在の「七宝作家協会」という社団法人にするために、文化庁に何度も足を運んだりもした。母がいたから、子どもを育てながら七宝焼きをやってこられたし、教室を開く資金も母から貸してもらった。家族はみな絵が好き。長女も教室で生徒さんを指導している。銀行員だった主人は会計面で協力してくれている。

七宝焼きに対する思い、夢、これからの計画

私は伝統七宝の技法も学んだが、型にとられない絵画的な創作七宝の方が好き。七宝焼きという、金属とガラスの融合の美

しさに私ははまり込んだ。焼かないと色がわからないという偶然性が魅力。装身具、器、絵画と、作品としての幅が広い。少しの場所があれば製作できる。私は趣味と実益のために七宝焼きを始めたが、決してもうかる仕事ではない。楽しいから続けてきた。教室は友だちづくりの場。また、作品を作ったら、いろいろな人に見てもらうことも大事。毎年教室展を行い、個展も23回している。

七宝焼きは、700度以上の温度で焼くことと、金属を扱うのでとつきにくい点はある。しかし息子が小学校のとき夏休みの宿題で七宝焼きを持っていったこともあり、以前は小学校でも七宝焼きを体験させていた。理解と経験のある先生が、子どもにも七宝焼きを教えてやってほしい。

40、50代以上の人には日本に古くから伝わっている七宝焼きが知られているが、若い人には知らない人が多い。これからも自分の知っていることをできる限り全部教えていきたいと思っています。

取材 栗原恵子(文)



つくり直したいのは、モノ？私？

まなこレポーター 斎藤 ユリ

帰省の度に実家で母に言うセリフ、「こんなにたくさんモノはどうするの。使う物だけ残して、さっさと捨てちゃってよ。いったい何人暮らし？」。憎まれ口をたたきながら、短い滞在中、せつせとモノを処分するのだが、焼け石に水。次行く頃にはまた増えている。

一方、我が家もモノであふれている。昨年、結婚以来15年住んだ家を引き払い、夫の実家に入った。それまでは嫁の立場ゆえに見ぬふりをしていたが、同居となるとそうも言っていられない。第一、持ってきた荷物が入らないのだ。ふとん・衣類で押し入れはいっぱい。頂き物の食器・雑貨などは未使用のまましまい込まれている。義母を看るために引っ越して来たはずなのに、私は毎日、家にもって、たまっているモノの整理に追われている。

便利なものが次々生産され手に入る現在、年老いた母たちが、それらをうまく利用して快適に過ごせるのならどんどん使えばいい。ただその場合、以前の品物は残しておいても使うことは、まずない。捨てるのはもったいないからと言っても、置いておく場所のほうももったいない。

結局、処分することになるのだけれど、すべてをゴミにしましまうのも気がひける。何とか別の形でも使えるものはないか、あれこれ考えてみる。紬（つむぎ）の着物で間仕切りの暖簾（のれん）なんかをつくったら、義母はそれこそ、「もったいない」と目を剥（む）くだろうか。雑誌に出ていた『いらぬ布でつくるぞうり』なんてどうだろう。考えようによっては、とても贅沢な材料を使えるのだ。何か工夫してちょっととした小物でもつくってみれば、でき上がった喜びだけでなく、不用品を再生させたという満足感も得られるかもしれない。

この1年、家の片付けをしていてつくづく考えた。押し入れにしまい込まれたモノなんて出して使わない限りただの不用品。私も家にもって鬱々（ふさふさ）としているばかりでは、しまい込まれたモノと同じ。たまには外に出て、趣味でも仕事でも何かを始めることにしよう。残りの人生、自分らしく生きるために。

まなこ67号アンケートから

『まなこ』のアンケートはレポーターを中心にお願いしています（レポーターは毎年3月に募集）

Q1 あなたは、日常の暮らしの中でどんなものをつくってみたいと思いますか？

- ・MYバッグ（古いジーンズをリメイクする）
- ・子どもの服、かばんなど。（複数回答あり）
- ・梅干と味噌。ぜひ一度作ってみたい。
- ・パン（複数回答あり）
- ・安心、安全な野菜
- ・てんこく いんざい 篆刻・印材で手づくりハンコ（いんしょう いんどう 印床、印刀から自作する）
- ・家庭内にたまった不用品から、日常的に使えるものを作ってどんどん使い切りたい。
- ・自分自身のライフスタイルを、まじめに作りたい。

Q2 あなたは、つくったものをどんなふうにしらべたり、役立てたりしていますか？

- ・自分で作るものは、サイズも使い勝手も自分の好みのできるの、使い心地がいい。
- ・ふと感じた季節の移りかわりなどを絵手紙にして、言葉を添えて送っている。
- ・ハガキを毎月、おもに年配の方に書くことを楽しみにしている。季節の花とともに描き喜ばれている。
- ・手づくりりんじんパンを焼き、友人にプレゼントしている。
- ・取れたての、とてもおいしい野菜を食べている。
- ・友人の贈り物に。
- ・着やすい、ぬぎやすい、身体が楽など高齢者の身体の変化に合わせたデザインを考えた。
- ・ローコスト、ハイリターンを目標にアイディアを練るのは苦痛だが、結果がいいとうれしい。

■ 平成19年度男女共同参画施策の予算

平成19年度市民協働推進課男女共同参画担当の予算は14,353,000円です。内訳は、

- ①男女共同参画推進市民会議費1,976,000円。
第二次武蔵野市男女共同参画計画策定のための検証・検討を行う市民会議の費用です。
- ②むさしのヒューマン・ネットワークセンターの管理運営費7,300,000円。
男女共同参画問題に関する市民・団体の自主活動・情報交換・ネットワーク化などを促進。管理・運営委託料、光熱・電話・回線通信費、複写・印刷機借上料などに適用されます。
むさしのヒューマン・ネットワークセンター利用者の増加により今年度より受付が全日2人体制になりました。
- ③男女共同参画施策事業5,077,000円。
講演・講座実施。男女平等情報誌『まなこ』作成。男女共同参画推進団体活動事業補助金などに適用されます。

■ 平成19年度 市の新規採用者は20名です

男女比は一般事務職で女性8名男性4名。一般技術職、女性1名男性2名。保健師は女性5名でした。

■ 4月より、課の名称が市民協働推進課になりました

場所は、7月より西棟7階に移り、ファックス番号も上記のとおり変更になりました。

■ 18年度男女共同参画推進団体活動 補助金交付対象事業の紹介

これは男女共同参画推進団体が男女共同参画社会の実現に向けて行った研修・調査・研究等の活動に対し、経費の一部を補助し、活動の活性化と市の施策の推進を目的としています。

補助金の交付は、1団体各年度1回、上限5万円です。申請団体が多数の際は、交付されない場合もあります。手続きは市民協働推進課へお問い合わせください。

- [18年度申請の11団体] (①団体名②内容)
- *①合唱団「わかば」 ②第四回演奏会
 - *①ピアカウンセリングむさしの ②講演会「地域で支えあうピアカウンセリング」
 - *①らっこの会 ②ひとり親あつまれ！シングルマザーの元気回復セミナー&交流会
 - *①国際児童文庫協会コアラ文庫 ②参加型の英語劇「Let's have a nice time together」
 - *①子どももおとなも楽しむ生活プロジェクト ②子育て情報マップ作成の基本データ調査（オムツ替えシート・子ども用トイレ・エレベーター等の所在場所）・父親へのアンケート調査
 - *①むさしのスカーレット ②「アジア女性のパワフルトーク」－韓国・中国の若いゲストを迎えて－
 - *①武蔵野市婦人団体連絡協議会 ②戦後60年、当市の実情収集・講演会
 - *①生活クラブ・グループ創 ②講演会「森と湖と福祉の国フィンランド・スウェーデンを武蔵野市民がたずねたら」
 - *①武蔵野ブラショフ女性問題研究会 ②男女共同参画シンポジウム「ルーマニアの男性・女性－今・昔ものかたり」
 - *①武蔵野プレイパーク自然遊びの会 ②講演会「『冒険遊び場』ってどんなところ？」
 - *①みんなでkids 陶芸 ②「子育て Man がカッコいい！親子・父と子 おもしろ体験講座の陶芸作品展&写真展」

Q3

お金を出せば何でも手に入る今の時代に、時間をかけて手づくりすることにどんな意味があると思いますか？

- ・気持ちのこもった手づくりのものは、人の心にうつたえるものがあるような気がする。
- ・手づくりとは、それらを使う人、食べる人への愛情の証し
- ・作品が完成することで、達成感・充実感を味わうことができる。
- ・自己満足
- ・ストレス解消

- ・「作らざるを得ない」こともある。（複数回答あり）
- ・自分の望むようにつくることで、愛着がある。
- ・ユニークな贈り物が準備できる。
- ・暮らしのゆとり
- ・「最高の贅沢」。
- 手づくり品はOnly one（複数回答あり）

*この他にも、いろいろなご意見をいただきました。

4月16日(月) 10:00~12:00 市役所第606会議室



レポーター会議風景

● 齋藤 ユリ (40代)

動く前に考えすぎて何も始めないよりは、思い切って踏み出して、そこで精いっぱいやってみようかなと思いました。何かを問いかけ、共に考えていきたいです。

ひろこ

● 清水 裕子 (33歳)

1歳の息子と共に楽しくも忙しい毎日です。今年度のテーマ「つくる」を、レポーター活動を通して見識を広め、自分の人間性、家族や友人など大切な人たちとの絆を深めていきたいです。

● 深澤 美香 (40代)

「書く」ことを通してどれだけ伝えたい事が理解していただけるのか……久々に机に向い、頭を抱えつつチャレンジしていきたいと思います。よろしくお願いします！

ゆきお

● 堀江 幸夫 (70代)

女性のチエと体験をチカラに変える地域情報誌『まなこ』で学ばせていただきます。50年前の初任地、武蔵野市で「初心に戻る」機会をいただき光栄です。

会議でのひと言

野菜を入れてパンを焼くのが楽しみ。春菊だと、よもぎパンのようになる。子どもが小さいので明け方の時間を有効活用。

「つくる」だけでなく、「こわす」ことも同時に考えていくことが大切だと思う。

一十百千万の健康処方箋

- ・1日1人、新しい人に自分から話しかける。
- ・10分間の運動
- ・どんなことでも100字の文字にする。
- ・新聞や雑誌以外に1,000字の文字を読む。
- ・10,000歩あるく。

むさしの
ヒューマンネットワーク
センター



今回のテーマに関する本を、むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書の中から



● スウェーデンの小さな庭から

ピヤネール多美子 著 オークラ出版



「子どもの頃から外国に住みたかった」という著者は29歳でスウェーデンに渡り、ストックホルム大学での日本語講師などの仕事を経て、フリージャーナリストに。戦場カメラマンの夫と出会い結婚して出産。家族や友人との交流を通して描かれているスウェーデンでの暮らしや文化、ジャーナリストとしての前線での危険な取材、難民の子どもたちのこと、ムーミンシリーズのトーベ・ヤンソンや「長くつ下のピッピ」のリンダ・グレンらとのエピソードなどが、写真とともに綴られている1冊。

● やさしいくらしの店 自然派ショップ全国ガイド

やさしいくらしの店探検隊 編 野草社



地球環境のことを考え、環境にやさしい暮らし方をしてみたいと考えたとき、安心して食べられる食品や安全な生活雑貨が欲しい。では、どこに行けば手に入れられるのだろうか。全国47都道府県、有機野菜や自然食、エコロジー雑貨、フェアトレードの店など各地の1店1店をまわって作られたショップガイド。「お店のひとこと」に作る人と求める人をつなぐやさしいくらしへの想いが記されている。

武蔵野市境2-10-27武蔵野市政センター2階 TEL・FAX 0422(37)3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp URL http://www.mhnc.jp/

STAFF

レポーター	齋藤ユリ・清水裕子 深澤美香・堀江幸夫
取材・編集	森 治美 (編集長) 大八木俊子・栗原恵子 戸田真帆子・浜 俊子
★他にもたくさんさんのアンケート協力員、編集協力員に支えていただいています。	
レイアウト	小井戸厚子
イラスト	本田 倫
印刷	社会福祉法人東京コロニー

● 10月発行予定の68号では、「言葉づくり、想いづくり(仮)」をテーマに、書く言葉、話す言葉について考えます。ブログ全盛の今、あなたは、どんな言葉を楽しんでいますか。

★パンもバッグも、無器用な私は手づくりが苦手です。せめて『まなこ』を通して仲間づくりのお手伝いができれば…。今年度もよろしくお祈りします。(森治美)

★近頃「技術力・モノづくり」などと言われ、日本人の最も得意とする分野のようだ。で、「美しい国づくり」も? (浜俊子)

★どんな「つくる」も人の心が出発点。気付きや感動を伝えたい気持ちで『まなこ』をつくりたい。(戸田真帆子)

★物づくりの話を聞いてるとわくわくしてくる。皆さんもご自分の手づくりを楽しんでみてください。(栗原恵子)

★子どもたちが小さかった頃、手づくりの惣菜が食卓を彩った。そして今、忙しいを口実にスーパーの惣菜が食卓に並ぶ。あの頃に戻れたら。(大八木俊子)

編集後記



まなこは再生紙を使用しています。